opusdei.org

人を成熟させる対話

2015/09/23

「陶工の器が、かまどの火で吟味されるように、人間は議論によって試される。樹木の手入れは実を見れば

明らかなように、心の思いは話を聞けばわかる」(シラ27·5-6)。成熟した人の確かなしるしの一つが、人と内容のある会話ができる能力である。それは、他人に対してオープンな態度をもつことで、暖かい付き合いと人から学びたいという誠実な望みに現れる。

「他の人や別の文化を知ることは、 いつも大いに役に立つことで、それ によって私たちは成長します。

 人と出会うためであって、喧嘩をす るためではないからです。では、対 話をして喧嘩をしないためには、ど ういう心構えをもつべきでしょう か。柔和になることです。柔和とは 冷静に他の人や文化を受け入れる能 力です。またそれは知性的な質問を する能力でもあります。『君はどう してそう考えるの』、『この文化は どうしてこうなの』と。相手の言う ことに耳を傾けて、それからこちら が話すのです。最初に聞くこと、次 に話すことです」(フランシスコ、 2013年8月21日の講話)。

人に耳を傾けること

聖書は、聞くことができる人には賛辞を惜しまないが、他人の言葉に注意を払わない人には辛辣である。

「命を与える懲らしめに聞き従う耳は知恵ある人の中に宿る」(箴言 15·31)。「だれでも、聞くのに早 く、話すのに遅く、また怒るのに遅 いようにしなさい。」(ヤコブ1・19)。時にはちょっとした皮肉を込めてこう言う。「聞かない者に話すのは、(…) 眠っている人を、深い眠りから呼び起こすようなものである」(シラ22・9)。

他人の言うことを聞かないようにされることを聞かなあることを聞かないあることを問題していることを思いますの話していると思いますのものでは活みが、ととを持っては活みで対話をはいるでは活発といるのとははいが、実際はによってはいが、実際はにないが、実際ではないが、実際ではいるではないが、まれない。

また時には、相手が黙っているので、頭を使って会話の糸口を探さないといけないという場合もある。そのような時に注意すべきは、こちらの頭脳の鋭さや博学さをひけらかす

よい会話ができるためには、大胆ささと慎重さを、好奇心と分別を本ないる。軽率なが要求される。軽率なばないよう気をつけれるではないなが、軽薄な言葉が思わずいとでが思わずいとした場合など、進んできだった場合など、進んであるべきだった場合など、進んであるできであります。

る。いずれにしても、よい会話はいつも実を残す。例えば、後で議論の最中に出てきたうまい考えやよい説明の仕方が思い出されたり、新しい直観がひらめいたり、こうした考えや印象の交換を続けたいという願望が生まれたりする。

周りに開かれていること

自分自身に閉じこもるのではなく殻 を破る必要がある。神に心を開き、 神のために隣人に心を開くのであ る。そうすれば、豊かな現実を私た ちの貧弱なものの見方や個人的興味 の中に閉じ込めてしまう自己中心主 義を克服し、隣人との間に壁を立 て、自己の未成熟さを内に暖める何 らかの欠点に陥らないように絶えず 警戒をしていることになる。その欠 点には次のような表れがある。よく わかっていないことについて有無を 言わさぬ仕方で断言すること、他人 は間違っていると言わんばかりに自 分の意見を押しつけること、前もっ て作り上げた解決法や何度も言われ た手垢の付いた助言を与えること、 誰かが自分と異なる意見を言うと腹 を立てること(そのくせ後から意見 の多様性や寛容の精神を擁護するの だが)、周囲にいる誰かが目立つと 嫉妬心を抱くこと、相手にも自分に も無理なレベルの完全性を他人に求 めること、自分は自己を矯正するこ

とに抵抗するのに、他人には誠実さ と正直さを要求すること、などであ る。

成熟さと批判的精神

隣人に対してやさしい心を持つな ら、しばしば友人としての助言で助 けることができることに気がつく。 それを見た人もあったが、直接注意 するだけの友情に欠けていたので 黙っていたかも知れないことを、相 手を信頼して言ってあげるだろう。 ただ愛徳に基づいて行動するときだ け、注意や批判は真に有意義で建設 的なものになる。「何らかの点で正 してあげる必要のある時は、愛徳を 忘れず、良い機会を捜し、相手を辱 めることなくそうしなさい。しか も、正してあげたことからあなた自 身が学び、その点で自己を改善する つもりでなければならない| (『鍛』455番)。

他人を改善させることができるかど うかは、ある程度、わたしたち自身 が自分を改善できるかどうかに関係 がある。自己改善がいかに難しい か、また同時にそれがいかに大切さ ですばらしいことかをわきまえてい るなら、他の人をそれなりに客観的 に見て、効果的に助けることができ る。自分自身にはっきりと注意する ことができる人は、他人に対しても いつどのようにそれを言うべきかを 心得ており、また自分が注意を受け たときは素直にそれに耳を傾けるこ とができる。

自分に対する批判に耳を傾け受け入れることができるのは、偉大な精神と深い知恵を持っている証拠である。「諭しを愛する人は知識を愛する。懲らしめを憎む者は愚かだ」(箴言12・1)。とはいえ、他人が言うことを受け入れるということは、いつも何を言われるか、何を言われるか、何を言われるか、何を言われるか、何を言われるか、何を言われるか、何を言われるか、何を言われるか、何を言われるか、何を言われるか、何を言われるか、何を言われるか、何を言われるか。

ない。なぜなら、そのような気遣い はほっておくと最後には病的なもの になるからである。時々、立派な仕 事をする人は批判の矢面に立たされ る。自分は何もしない人たちが、そ のよい仕事や生き方を自分の無為の 生き方に対する非難と考えて批判す るのかも知れない(知恵2・10-20参 照)。あるいは、逆の行動をする人 たちが、自分たちの敵だと考えて批 判することもある。また同じような ことをしている人たちが、嫉妬にか られて批判に走ることもある。ひど いときには、何もしない人たちや自 分たちを頼りにしないなら良いこと は何もできないと考えている人たち に「赦しを願う」必要があることも ある。こういうことが起これば、聖 ホセマリアの次の助言を実行する機 会が来たと考えよう。「あなたたち と私が沈黙し、祈り、働き、微笑 み、そして希望することを習うべき 時がきたという証拠である。それら の暴言を気にしないように。彼らを

心から愛しなさい。Caritas mea cum omnibus vobis in Christo Iesu (私の愛はキリスト・イエスにおいてあなたたちみんなと共に)」 (1964年3月20日、オランダのメンバーへの手紙)。

模範を示す責任

成熟した人は、一方で他人への開か れた態度と、他方で自己の道と信条 への忠実を調和させる。ほとんど誰 も自分に理解を示してくれない場合 でも。周囲が無関心なら、こちらの 側にも何か変えるべきことがある、 あるいはせめて自分のことをもう少 しよく説明する必要があると考える ことはよいことである。しかし、私 たちの側に決して変えてはならない ものもある。何があっても、私たち の言うことを聞かれようが聞かれま いが、褒められようがけなされよう が、感謝されようが無視されよう が、認められようが否定されよう

が、守るべきものもあるのだ。「あなたの行ないは信仰の現われだから、衝突によって生じる対照こそ、あなたの持つべき自然さなのだ」(『道』380番)。

良かれと思って尽力しているのに、 誰も助けてくれず孤独を感じること は珍しくない。そのようなときもう 止めようという強い誘惑が襲ってく るかも知れない。自分の模範や証し はほとんど役に立っていないと見え るだろうが、しかしそうではない。 一本のマッチの光は部屋全体を明る くしないにしても、部屋にいる全て の人に見える。おそらく多くの人 は、その模範通りに生きることは自 分にはできないにしても、自分ので きる範囲で真似てみようと考えてい るのかも知れない。その模範は彼ら の改善に役立っているのだ。

誰でも、自分が多くの人たちのよい 模範のおかげで助けられたという経 験を持っているだろう。しかし、その人たちのほとんどは自分がよい影響で誰かを助けたことに気づいていない。他人によい影響を与えるという責任は重い。「怠慢や悪い模範であなたの兄弟である人々の霊魂を破滅させることは許されない」

(『鍛』955番)。私たちは隣人に話しかけ、助言し、励まし、元気に大り、助言し、からないとりなる。これではある。これではない。ではない。ではない。いるないではない。いるないであるが、ではない。と望み、悪いもではならいと望み、悪い事がである。と望み、悪いもならない。

一生の戦い

隣人に開かれているということは、 人生の一つの課題にどのように進歩 しているかと密接に関わっている。

その課題とは自分の傲慢を認め謙遜 になるために努力することである。 傲慢は、隣人との関係において思っ ても見ないような割れ目から進入し てそれを毒する。もし傲慢というも のをありのままに見るなら、その姿 は吐き気を催させるだろうが、その ために傲慢は極めて巧妙に自分の顔 を隠し、仮面をかぶって現れる。傲 慢は一見すると積極的な態度の中に 隠れているのが普通である。その 後、傲慢がもっと強固になると、未 熟な人格に固有な、より単純で直裁 な現れが目立ってくる。すなわち、 病的な猜疑心、絶えず自分について 話すこと、虚栄心、きどった振る舞 い方や話し方、えらそうな態度、そ れに反して自己の弱点に気づくとき ひどく落ち込むことなど。

傲慢は時には賢さの衣をまとう。それは知的傲慢とでも呼べるもので、 過度の厳格さとなって現れる。また 他の場合、正義を行い真理を守るこ とを激情的に望むという態度の裏に 隠れる。その態度の底には、仕を をしたい望み、自分さきだといる 者で他人は自分に従う。あるでも であるでもいという、 有でものもいという。 有でもり判断したいという まり、真理に仕える代わりにも まりいまという である。 を言いるとを である。

とがある。友人の注意や建設的な批判に耳を傾けるなら、様々な仕方で隠れている傲慢の仮面を暴くことがより容易になるだろう。隣人に助けてもらうには、謙遜になる必要がある。また、隣人を優しく助けるためにも、謙遜になる必要がある。

つまるところ成熟さとは「常に人のことだけを考える。——このような、言わば〈健全な心理的偏見〉をもつこと」(『鍛』861)に帰着する。神が私たちにお望みになが、格、一誰もがそれを望むのだがしまった人の場所にそれを探して苦しずる。 一その人格は「愛する心、苦しずる、隣人と一緒に喜ぶ心」(フラを持つに至った人のそれである。

アルフォンソ・アギロー

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/seijukusaseru-taiwa/ (2025/12/10)